
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 26 号

<目次>

巻頭言 1

特集 記憶の中の台湾

—思い出の場所、思い出の人— 3

日本台湾学会活動報告 14

巻 頭 言

台湾における台湾文学教育

理事長：山口 守 (日本大学)

昨年8月から今年3月まで台湾大学文學院に客員教授として滞在し、台湾文学研究所(2004年創設、研究所は日本の大学院研究科に相当)で一学期(計18回)講義をした経験から、台湾における台湾文学教育の一端を紹介しながら、関連事項について書いてみたい。

講義は週一回、午前に「中文文学」(台湾文学研究所と中国文学研究所の共通授業)を中国語で3時間、午後に「日文学」(台湾文学研究所と日文学系の共通授業)を日本語で2時間という、見方によっては疲れる、しかし体験してみると充実感のある講義体験であった。「中文文学」と「日文学」を同時開講したのは、対象と方法論が交差する地

点から台湾文学を再考してみようという意図からだった。

受講者数は両講義とも20名弱、修士・博士課程の大学院生が主で、少数ながら留学生、聴講生、学部生も含まれていた。予想外だったのは、院生の所属専攻で、「中文文学」の当初の受講登録者は、台湾文学専攻が少数派で、半数が中国文学、他に戯劇、歴史、政治、外文、更には理系の電機の院生も受講していた。「日文学」は更に受講生の専攻が多様で、台文、日文、中文以外に、法律、外文、物理、電機、商学、農業経済、動物学、社会学の院生・学部生が受講登録した。

この専門領域を超える学習・研究方法は台湾大学の学風の一つに挙げられるかもしれない。私が所属した台湾文学研究所も、専任教員6名、兼任4名の指導の下、修士46名、博士11名、計57名(中国文学研究所は修士96名、博士62名、計158名)の院生が学んでいるが、成功大学のように台湾文学専攻の学部を持つ大学と異なり、言わば「大学院大学」であることも関連してか、院生の学部時代の専攻は多様である。

従来は平均して60%程度が中文系出身だったが、現修士2年生ではそれが20%、1年生では50%と劇的に変化している。台湾文学研究が中国文学研究と連続・関連しているとの見方は、少なくともこの数字を見る限り、あまり当てはまらない。「台湾」も「文学」も超域的な研究分野であることが発展の要因であることは贅言を要しない。

ただ台湾文学の教育や研究に多様性・多元性があることは確かでも、その学術世界に複雑な社会情勢が影響を及ぼすことも一方の事実である。

例えば、現時点で台湾全体の台湾文学関連の学部・研究科数を見ると次のような実態がある（ネット検索による）。

台文系を持つ大学	7校
台文所を持つ大学	10校
中文系を持つ大学	38校
華文系を持つ大学	11校

この数字を見ると不思議に思う人がいるかもしれない。台文系よりも華文系の方が数としては多いからである。ただし、この比率が直接台湾の文学研究動向を反映しているのではなく、教育・学術政治もしくは社会意識を反映していると考えた方がよいだろう。

具体的に言えば、まず現在台湾の各大学の中文系に現代文学専攻の教員は極めて少ない。台湾大学中文系でも53名の専任教員のうち現代文学を専門領域とする教員は1名しかおらず、他はすべて古典文学か言語等である。一方、各大学の台文系の教員の多くは現代文学・文化・言語等を専門としている。華文系は現代も古典も言語も含むことが多い。つまり台湾文学と中国文学を両端に置いて、中間に多少ニュートラルな系として華文系があるという構図が見えてくる。

つまり、本土化や大学教育改革の流れの中で、中国文学は漢族の過去の文明を示す符号となり、逆に台湾文学は現在の台湾を立脚点として過去へ遡及していく学問となっているように思える。その中で折衷的、中間的な立場を取ろうとする際に、選択肢として華文系があるのだろう。また華文系創設には国際化という理由も見出されるのかもしれない。

こうした状況は中国と全く異なる文脈で考える必要がある。中国では1990年代以降、中国文学と海外華文文学が明確に区別され、華文文学はあくまでも中国国外で生産・消費される華語の文学であるとの認識が一般的なので、中間的な分野として華文文学があるとの考えは成り立たない。台湾では近年、王徳威（ハーバード大学）、史書美（UCLA）

らによって提唱された華語語系文学 Sinophone Literature が盛んに論じられているが、その背景にこうした台湾文学を取り巻く環境も影響しているのだろう。

紙幅の都合でこの議論を展開できないため、最後に台湾の民主主義実践を目の当たりにした体験を書いて締め括りたい。今回の滞在中、大規模集会を参観する機会が二度あった。ちょうど到着直後と離台直前だったこともあり、忘れられない記憶となった。

台北に到着してまもなく、2013年8月3日に総統府前で洪仲丘事件（徴兵期間中の大学院生が軍隊内で虐待を受けて死亡し、隠蔽工作が明らかになった事件）の抗議集会が開かれた。夕方の散策のついでに見に行くと、総統府前はずで見渡す限り白い服を着た参加者で埋め尽くされていた（当局側発表で10万人以上、主催側発表で20万人以上）。若者ばかりでなく、子ども連れ、老人同士など年齢も様々で、また集会に参加しない通行人のために通路をきちんと空けて座り込み、整然と行われた抗議集会だった。これだけの群衆が集まったにも関わらず、一件の暴力事件も報告されず、極めて平和裏に行われたのが印象的だった。

またまだ記憶に新しいが、この3月に中国との貿易協定問題をめぐって学生が立法院を占拠した際も、台湾大学の教え子が院内で座り込みをしていると聞いて、様子を見に行ったところ、院内や周囲のあちこちで討論集会が開かれ、機動隊が周辺に配備されていたものの、子ども連れで参加している市民もいて、熱くかつ冷静に社会問題を語る姿に心を動かされた。自らの手で民主主義を実効化しようとする理想主義と、異なる意見に敬意を払う自由主義が同居する、民主社会の祝祭的な雰囲気があった。

（台湾大学で行った講義は「台大開放式課程 NTU Open Course Ware」として動画公開されている）

中文文学：

<http://ocw.aca.ntu.edu.tw/ntu-ocw/index.php/ocw/cou/102S107>

日文学：

<http://ocw.aca.ntu.edu.tw/ntu-ocw/index.php/ocw/cou/102S106>

特集
記憶の中の台湾
—思い出の場所、思い出の人—

1973年の「霧社事件」騒動

河原 功 (台湾協会理事)

台湾観光のハイライトは故宮博物院だが、それと並んで忠烈祠がある。忠烈祠は抗日英雄をも祀る神聖な場所だが、観光客にその意識は希薄で、もっぱら衛兵交替の儀式を見学し、衛兵と一緒に写真撮影をして満足する。奥の建物の左右に烈士の位牌が数多く祀られているが、そこまで足を運ぶ観光客は1%もいない。

右側の建物に、霧社事件関係者では原住民族が二人だけ、「莫那魯道」(モーナ・ルダオ)と「花岡一郎」(ダッキス・ノービン)の位牌が安置されている。この事実は、台湾研究者でも知る人は少ない。

霧社事件のリーダー「モーナ・ルダオ」の遺体は、1934年にマヘボ溪谷の洞窟で発見された。遺体は台北帝国大学に運ばれ、戦後は台湾大学に引き継がれた。

1969年3月11日、私はその考古人類学系の標本室(資料室)でモーナ・ルダオと対面する機会を得た。モーナ・ルダオの白骨遺体は、発見当時の粗末な木箱に収められたまま、床に無造作に放置されていた。身長180センチほどの巨体で、ほぼ裸体。一部がミイラ化していて、手首にまだ皮膚が貼りついた状態で、実に痛々しい状態だった。脇には、蕃刀2本、煙草入れが添えられていた。私はカメラを持っていたのだが、妖気が漂っていて、写真撮影をためらった。

1973年8月28日、台湾省文献委員会(台中)で「霧社事件座談会」が開催された。目的は、「事件に参加した生存原住民の口から直接当時の状況

を聞き出すこと、新たな資料と事実を紹介すること」にあった。省文献委の洪敏麟の企画によるもので、原住民側から高永清、高愛徳、曾小炳、蔡茂琳の4名、省文献委からは張炳楠(主任委員)、王詩琅、廖漢臣その他、それに来賓として梁舒里(『台湾抗日史略』の著者)と私、さらに省政府民政庁や省立台北図書館の職員など、全部で30人ほどが出席していた。座談会は午後2時から6時まで、4時間にも及んだ。

この座談会は、中視新聞(中国電視)でも放映され、翌日からの新聞各紙を賑わした。

29日 「洪敏麟発言：花岡一郎二郎は抗日烈士に非ず、日本軍閥の『走狗』だった」(聯合報、中国時報)、「花岡一郎、実は投機份士」(台湾日報)、「第二霧社事件は日本側の策謀によって引発された(根拠は江川博通『霧社の血桜』)」(中国時報、中華日報)、「内政部表示：花岡一郎二郎を抗日英雄と偽ってみせた事実があるならば、忠烈祠から除名する」(中国時報)

30日 「洪敏麟：花岡一郎抗日烈士に非ずの根拠を提示」(聯合報、中国時報)、「国民党南投県党部：今回の花岡問題を重視」(中央日報、聯合報)、「高光華(仁愛郷長、二郎の遺児)：洪敏麟発言に対して、憤慨しながら遺憾の意を表明」(中央日報)、「張炳楠(主任委員)：花岡一郎二郎が日本軍閥の『走狗』である実証をつかんでから、内政部に報告し、忠烈祠から除名してもらおう」(中国時報)、「楊雲萍(台大文學院、台湾史)：洪氏発言は証拠不十分」(中国時報)

31日 「洪敏麟：根拠を再提示」(聯合報)、「蔡鴻文(省議会議長)：張炳楠主任委員に対して台湾の史実問題に関しては慎重に処理するよう特に要請」(中央日報)、「南投県党部、南投県文献委、高光華ら：花岡二人の偶像にはやや疑問のあることは認めるが、再び深く調査し、心して証明に努め、軽率に『否』と断言すべきではない」(台湾日報)

9月1日 「謝東閔省主席：文献委員会に、重ねて調査するように、事件の真相を明らかにするように、史家たちの意見を尊重するようにと通達」(中央日報)、「省文献委：霧社事件に関する資料を採集することを決定」(中央日報、聯合報)、「忠

烈祠には花岡一郎とモーナ・ルダオが入っていて、二郎は入っていない。それは文献委員会の公式資料に依ったものである(中央日報)、「楊雲萍：花岡二人は抗日英雄である」(中国時報)、「高明義(清流に住む原住民)：高永清を非難」(台湾日報、聯合報)

2日 「高光華：仁愛郷公所では花岡一郎二郎の『忠奸』を深く調査することを決定」(中央日報)、「洪敏麟：モーナ・ルダオの遺体をしかるべく安葬することを提議」(余錦泉、蔡錫圭、廖永清：モーナ・ルダオの遺体を台大に持込んだのは当時医学部解剖学教授の金関丈夫)「閻振興(台大校長)：モーナ・ルダオの遺体をいまだに台大に、しかも一個の箱の中に入れて古物標本として陳列していることは尊敬していないことである。今後のことは教育部と相談する」(聯合報)

3日 「洪敏麟：高明義の高永清非難を批判」(聯合報)、「モーナ・ルダオのミイラを安葬せよ」(台湾日報)

4日 「洪敏麟：花岡一郎に関して深く研究されることを歓迎する」(中国時報)、「巫来盛(当時埔里で雑貨店を経営)：花岡一郎は抗日隊を組織、抗日を指揮していた」(中華日報)

5日 「省文献委：霧社事件の真相を究明するための委員会を組織することを決定」(中国時報、聯合報、中華日報)、「洪敏麟：モーナ・ルダオの抗暴史実を重視し、彼を民族英雄として敬うよう、その遺体はしかるべく安置せよ」(中華日報)、「国防部史政編訳局：省文献委に文書で、一郎についての事蹟また霧社事件の詳細な正確な資料を提示すれば烈士の修正の決定根拠とすると発表。しかし、現在の決定は民国58年に文献委員会が提供した史料に基づいているとも表示」(聯合報)

この「霧社事件」騒動はその後もくすぶり続くのだが、最終的には、モーナ・ルダオの遺体を霧社に安葬することで幕引きが図られることとなった。その経緯は、2010年10月27日、霧社での「霧社事件80周年記念式典」で、劉忠仁・張呈妹夫妻と出会い、彼らの供述からも理解できた。

劉忠仁さんは、正名＝パワン・ネユイ、日本名＝坂本忠仁、1938年9月1日生れ(パーラン社)。

張呈妹さんは、正名＝ルビ・マホン、日本名＝小田美代子、1941年12月26日生れで、生後2ヶ月(1942年2月)にマホン・モーナ(モーナ・ルダオの妹、未婚)の養女となった人物である。

劉忠仁・張呈妹夫妻は次のように語ってくれた。

マホン・モーナは、1973年3月7日に亡くなったが、「事件はモーナ・ルダオが起こした。遺骨を捜し求めよ」と遺言を残した。すると、1973年9月のテレビの放映で、モーナ・ルダオの遺体が台湾大学にあることを知った。そこで、その遺体の返還を求めることにした。

埋葬地をめぐることは、私たち夫婦(劉忠仁・張呈妹)は霧社を主張したが、長老たち7名は清流(日本時代の強制移住地「川中島」)を主張して、意見の一致が見られなかった。結局、3回目の会合で、遺族の権限をもって「霧社に埋葬する」ことを決断した。

そして、同年10月25日、私たち夫婦は、郷長の中山清、ほか1名で、遺体を引き取るために台北に向かった。省政府、県政府の役人も同行した。棺桶は埔里で購入した。そして、粗末な木箱に入った状態のままモーナ・ルダオの遺体をそのまま、副葬品とともに棺桶に納め、27日に霧社の地に埋葬した。

台湾省文献委員会での霧社事件真相解明はその後どうなったのか、わからない。だが、忠烈祠にはこれまでどおりモーナ・ルダオと花岡一郎の位牌が安置されているから、二人は抗日英雄として再確認されたことになる。花岡二郎の忠烈祠入りは実現していない。

1973年の「霧社事件」騒動での唯一の成果は、モーナ・ルダオの遺体が霧社の地にやっと葬られたことであった。

台南に暮らしたはじめたころの記憶

—林瑞明先生のこと

松尾直太 (呉鳳科技大学)

大学卒業後、私は耐火煉瓦メーカーに勤めた。耐火煉瓦とはセラミックスの一種で、溶鉱炉のような高温にも耐えられる工業用無機材料であり、鉄鋼・セメント・非鉄金属・ガラス製造になくはならないものである。その会社で、私は製造コストの分析管理者になるための修業をしていた。簿記の学習が課され、耐火物工場の原料から始まり、各製造工程を経て、製品の完成に至るまでの状況を観察し、その原価計算の習得が必須とされた。その上で、工程の見直しによるコスト削減の提言を行なうことが求められた。しかし、元来数学が極度に苦手な私にとって、これは難行苦行であった。そんな職を辞して台湾へ飛び出したのは1995年の夏のことである。

そもそも、私は研究者を志そうとか、台湾文学を専攻しようとか思っていたわけではなかった。ただ文学とは別の文化領域を学ぶことを希望して台湾に赴いたのだった。もっとも、それは漠然としていて、上述の辛い現実からの逃避の意味合いが多分にあったように思われる。

そんな私が入学したのは台南にある成功大学歴史研究所だった。何も分らないまま、たまたま選んだ科目のひとつが「台湾文学と文化」というものだった。思えば、この科目を選択したことが、そして担当教員の林瑞明先生に出逢ったことが、その後の私の歩む道を変えたといってもよいだろう。以下、林先生を知り始めた頃の記憶を辿ることで、編集者の依頼に応えることとしたい。

林瑞明先生は、台湾意識を強く持つ台南出身の歴史学者であり、林梵のペンネームを持つ詩人でもある。かつて台湾の歴史や文学の研究がタブー視されていた戒嚴令時代より、台湾研究に従事し、頼和研究で知られていた。けれども、当時の私は先生について予備知識を持っていなかった。また、先生は台湾文学が大学で専門研究領域として正式に認知され、それを専攻する独立した学部や院が設立されることに尽力、貢献した文学史家の一人

であり、台湾文学館の初代館長（2003年、国家台湾文学館籌備処初代主任）を務めた人物でもある。

さて、10月初め、「台湾文学と文化」の二度目の講義のときだった。林先生が私を呼びとめ、「あとで研究室に来なさい」と仰った。台南へ来て一ヶ月余り、語学力の不足から、講義内容もよくのみこめず、終始とても緊張していた。そんな矢先だったので、一体何のご用だろうと、非常に不安な気持ちで研究室をお訪ねしたことを覚えている。

部屋に入ると、机にうずたかく積み重ねられた大量の書物で視界が遮られた向こう側から、姿の見えない先生のお声だけが聞こえてきた。先生は、本の壁から柔和で親しみやすいお顔を現し、不意に一冊の本を私に差出された。そうして、「松尾、この本を貸してあげるから読みなさい。返却は二週間後でよいから。」と仰るではないか。それは下村作次郎著『文学で読む台湾』だった。ああ、先生は日本語で書かれたこの本で少し勉強しなさい、と助言してくださってるのだなと悟ったものだった（ちなみに、本書は私を台湾文学の世界へいざなってくれた記念すべき書物となった）。

恥ずかしながら、当時の私は、台湾の歴史や文学への基礎的知識をほとんど持っていなかった。したがって、最初は貸していただいた書物を読んでも分からないことだらけだった。にも拘らず、先生は相変わらず、こちらからお願いもしないのに、毎週自ら数冊の本を陸續と貸し続けてくださった。私は先生のご好意を有難く感じる一方で、ご親切を無にしないよう、早く読み終え早くお返ししなければと、やや焦ったり緊張したりして過ごしたものだだった。

そんなふうにして接した書籍のうちで、印象に残っているものを挙げてみると、『夜明け前の台湾』『アジアの孤児』（ともに呉濁流著）、『さよなら・再見』（黄春明著）、『北京銘』（江文也著）、『旧植民地文学の研究』（尾崎秀樹著）、『華麗島文学志』（島田謹二著）、『よみがえる台湾文学』（下村作次郎・中島利郎・藤井省三・黄英哲編）、『台湾の日本語文学』（垂水千恵著）、『台湾』（王育徳著）などが思い出される。周知のように、あるものは斯界の著名な文学作品、あるものは古典的研究書、またあるものは当時における最新の研究書である。

また、これらとは別に、買って読むように言われた書物も多数あった。大半は忘れてしまったけれど、彭明敏著『自由的滋味』に感動したことは今でも忘れられない。

こんな形で、分からないなりに本を読んでいくうちに、鈍感で要領の悪い私でも、さすがに台湾の歴史・文学の幅の広さや奥の深さに、少しずつ気付き始めるようになっていった。それと同時に、講義やお借りした本の中から、いつのまにか興味を惹かれることにも出逢うようになっていった。

当時、台湾研究に没頭しておられた先生は、目の前に突如現れたこの日本人の若者に、何とかして台湾の歴史や文化を少しでも理解してもらいたい、台湾と日本との係わりを少しでも知らせ、それらに興味を持ってもらいたいと思ったのではないだろうか。そのために、自らが所蔵する古い資料や、日本から献呈されたばかりの大切なご本を、「持って行きなさい」と惜しげもなく、実にあっさりとは貸して下さったのだろう。今にして思えば、これはいわば先生が私に開いてくれた無言の特別授業だったのだ、と感謝している。

先生の台湾研究に傾けるそのような熱意と寛容なお気持ちに、私もいつしか惹かれていった。このような出逢いが契機となって、日本統治期の台湾文学研究に知らずしらず興味を感じるようになり、後に先生に師事するに至った。これは、自分にも予期しえなかったことであり、はなはだ不思議な結果だと思っている。

附記：本文は『南風 林梵還曆桃李集』（林梵・林梵桃李52人著、INK：中和、2010）に寄せた文を綴り直したものである。

宗教の場をフィールドとした 「直接接触」・「直接交流」

藤野陽平

（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
研究機関研究員）

私が初めてフィールドに足を運んだ経緯は、博士論文をもとにした拙著（『台湾における民衆キリスト教の人類学 社会的文脈と癒しの実践』風響社2012年）の「あとがき」に記したが、そこでは学術書というスタンスからは描きにくかったことがある。ここではそういう部分を吐露させていたきたい。

私は宗教人類学を専門とし、特に博士論文までの調査は民衆宗教のシャーマニスティックな癒しについてフィールド調査を行ってきた。そうした場ではシャーマニズムの行われる現場に身をおいていたために、生身の身体を持つ調査者にも様々な影響が現れうる。

私の基本的な調査でのスタンスを確認しておきたい。調査対象が極端に反社会的な団体でもなければ、私は対象に共感しつつ、できるだけ接近し、しかし、信者になる事はなく最終的に一步引くという立場をとっている。そのため参加の許可がおりれば、できる限り礼拝、儀礼、儀式や祈り、瞑想、座禅といった宗教実践の場に足を運び、できるだけ真似事をするようにしている。本稿はそうした中で起きてしまった「直接接触」・「直接交流」の体験談である。

真耶穌教会で

私の主な対象は真耶穌教会というプロテスタント教会である。この教派はペンテコステ派という聖霊との直接交流を重視するグループに位置づけられ、霊言と呼ばれる意味不明の言語を語ることが神の臨在の証しとなっているという教義がある。礼拝中、全員が跪き、手を組んで「哈利路亞！讚美主耶穌！」と大声で繰り返す。そうすると手が震え出し、「哈利路亞」と言おうとしても舌がもつれて「ハレレレレレ…」と巻き舌のような状態となる。

初めてここで参与観察を行った時、教えてもらったように、跪いて「哈利路亞！讚美主耶穌！」と祈ってみることにした。そうしたところ、私の手までもがブルブル震えだしてしまふ。もちろん自分の意思で、そうしているわけではない。止めようとグッと力を入れれば止まるのだが、そうしないで脱力した状態ならば震えは止まらない。「こまったな、、、」これが、素直な感想だった。できるだけ、共感をしつつ研究対象に接近すると言っても、実際に入信するつもりはないので、身体感覚を伴った実体験までを受け入れる心の準備まではできていなかった。

その後、霊言を語るといったそれ以上の経験はしなかったものの、フィールドとの印象的な初接触となった。

真耶穌教会以外でも

調査中、真耶穌教会以外の教派の、とある牧師を紹介されインタビューをした。彼は祈りの力によって病いを癒すことができるという。一通り説明を聞いた後に、それではやってみようということになり、私が実験台となる。

言われるがまま、牧師の前に立って両手を前に出し、手を合わせる。牧師が「奉耶穌的名」といった後に「ムニヤムニヤムニヤ」と何やら不明瞭で呪文のような祈りの言葉を発する。そうすると私の左手が伸びたのである。いや、正確には左手が伸びたように感じたということで、直前の説明は私が得意ではない台湾語で行われ、正直、具体的な内容を了解しきれていなかった。

その後説明を受けてみると、人間は大抵背骨が曲がっているから、両手を前に出すと両手が少しずれている人がほとんどであるので、今回はその背骨のズレを直したから、左手が少し伸びたように感じたということであった。そこで行われる内容を理解していれば暗示か何かでそういうことも起きうとは思いますが、内容を理解していなかった状態であっただけに正直驚きを隠せなかったというのが、振り返ってみての感想である。

キリスト教以外でも

私の専門はキリスト教の宗教人類学研究だが、キリスト教だけを対象とするのではなく他の宗教と比較しながら研究している。調査中キリスト教以外で宗教と癒しの問題を考える格好の事例に思われたのが法輪功であった。

私が語学研修を受けていた成功大学にも「練功点」といわれる練習場所にされていて、授業前後の空いた時間に、少しずつ調査を行った。さそわれて予定が合えばいろいろな行事に参加するようになっていったのだが、その1つに読書会という集まりがあった。

そこで30分ほどの座禅を終え、参加者と会話をした際に「頭からオーラのようなものが出ていた」と伝えられた。座禅でしばれる足を我慢するのに精いっぱいであったし、なにより座禅中は目を閉じていたので、真偽は私にはわからない。私に対する布教目的で何か神秘的なことを言ったのかもしれないが、このような言説が聞かれたのは確かである。

おわりに

どうも私はトランス状態になりやすい体質なのだろう。日本でもペンテコステ派の礼拝中に気絶して倒れたことがあるし、都市祭礼の参与観察中に若者衆と共にハイになることもある。宗教人類学者の大多数はこういった経験をしないだろうが、私の場合にはこのようにヒト以外のインフォーマントともゆるやかに「直接接触」・「直接交流」をしてしまった。

明記しておくべきこととして、私は、これらの教団の信者ではなく、こうした体験主義の信仰も持っていない。こうした経験は超自然的なものとの接触ではなく、何かしらの脳内の反応、もしくは直接的に接触してしまっただけと理解している。それでもやはり、こうした経験の上に拙著は記されたのである。フィールドでなければ体験できない、フィールドサイエンスならではの経験である。その場に居合わせた人は皆トランス状態なのに、調査者だけが、特別な無色透明の存在でありトランス状態にならないというものではないだろう。

フィールドで共有される情動を調査者も共有すること、それに裏付けられた研究のもつ意味は大きいはずである。学術の世界から切り落とされてきたその場で調査者と被調査者の間で共有されている情動への気づきが、あらたなフィールドサイエンスの理論構築に果たす可能性を内包しているかもしれない。

1950年代通俗作品の再発見 —貸本屋からはじまる研究への契機— 張 文菁 (早稲田大学非常勤講師)

私が研究テーマとして、戦後台湾の通俗小説にたどり着いたのは、いくつか契機がありました。まずは、なんと言っても自分の幼少期の読書体験に関する記憶でした。

14歳までを台湾で過ごした私でしたが、学校から帰宅するなり、よくお小遣いをもらって貸本屋にひた走りました。そして、薄暗い店内の椅子にうずくまり、夜ご飯も忘れて長い間そこで過ごしました。年代的に言うと、ちょうど70年代後半から80年代半ばの間でしたので、当時の貸本屋は、いまのような商業化の波に乗った多角的に展開する店舗ではなく、街角にある個人営業の小さな店でした。店構えが素朴でも、幼い私にとって一番楽しい場所でした。それでも店の品揃えに飽きたり、読みたい本が借り出されたりすると、わざわざ自転車で遠出して別の貸本屋を巡ることもありました。

瓊瑤の小説を、漫画や武俠小説が好きだった私は、まったく見向きもしませんでした。しかし、幼少時の貸本屋通いを思い返すたび、戦後最大の通俗作家瓊瑤の人気を反映したように、ほぼどの貸本屋でも彼女の小説や雑誌『皇冠』をよく揃え、壁一面の本棚に並べてあるという光景が蘇ります。まさに瓊瑤の全盛時代でしたので、その作品が出版されるや映画化され、主題歌や主演俳優の人気と相まって、社会現象とも言えるほどその恋愛物語は常に人々の注目的でした。幼い私も親戚に連れられて何度か劇場に足を運び、人の波で溢れたゲートをくぐり抜けて席に就いた経験があります。

20年以上も続いた瓊瑤作品の人気を解き明かしたいという考えが、私の研究の根幹をなす問題意識でした。しかし、いざ着手してみると、当時の人々にとって瓊瑤作品がほかの作家と一線を画すほどの「特殊性」がよく見えず、研究の展開は説得力に欠けていました。テキストを分析し思想的に読み解くよりも、私の関心は通俗小説の歴史

的、さらに社会的背景との結びつきにありました。考えあぐねていた私に対して、指導教授である早稲田大学千野拓政先生の発した質問が、発想転換の契機となりました。「瓊瑤の前はどんな状況だったか」。この一言が方向を指し示す一筋の光となりましたが、同時に、その前段階に当たる50年代の通俗小説や作家がいままで埋もれていたことに気づかされもしました。

およその台湾文学史は、50年代を「反共郷愁文学の時代」と捉える一方で、瓊瑤の出現を20年代の中国鴛鴦蝴蝶派が台湾で復活を遂げたという見解が大方です。そのなかで、葉洪生・林保淳『台湾武俠小説発展史』（遠流出版、2005年）は、武俠小説を中心に据えた論考ですが、それを専門とする出版社が50年代末から次第に現れたという解説は非常に参考になりました。

少ない手がかりをたぐり寄せるも、当時の通俗出版の状況がよく掴めないまま、私は2008年10月の日本中国学会で言情小説作家金杏枝と禹其民に関する研究発表を行いました。そのなかで、早稲田大学教授村上公一先生の論文で言及された、50年代初期の貸本を例として挙げ、貸本屋という場を通じて通俗の読み物が人々によって享受されていたことを報告しました。だが、実際はどんな通俗小説が流通していたのかは不明でしたので、発表は不満が残る出来でした。

それでも、私にとって大きな収穫となったのは、会場で村上先生のお目にかかり、さらにその後、長年かけて集められた古本や貸本屋の資料を数点貸与していただいたことでした。これを契機に、50年代通俗小説は資料の散逸により、作家の存在や作品内容、ひいては出版社から貸本屋へ結ぶ販売路線が体系的に整理されてこなかったということを知りました。

古本屋経由でしか50年代の通俗小説を入手できないことに気づかされた私は、台湾に行く折々に台北や台南などの貸本屋を巡りました。そのなかで、師範大学の近くにある、知る人ぞ知る古本屋「旧香居」を訪ねたことにより、人脈の広い店主呉雅慧の紹介によって数々の本や人と出会いました。いままで資料で書名のみを知っていた本を入手したり、古本コレクターの方たちとの交流で、

現在では手に入らない書籍の写真を頂戴したりすることがありました。

記憶のなかの貸本屋から出発し、数々の契機や出会いを経て、ようやく私の研究は50年代通俗出版の状況にある程度捉えられるようになってきています。もっとも、私が見ているのは自分の手元にある資料から見た視座ですので、これからも新たに発見する資料によって大きく変貌する可能性はあります。戦後の台湾通俗小説は、戒嚴令下における政治的圧力や社会的状況、さらに読者の好みの変化によって、少しずつ類型の裾野を広げ、発展してきました。瓊瑤の出現は、その前段階の歴史があるからこそ、台湾という土壌において受容されたのだと言えます。

戦後台湾通俗小説の発展は、長らく反共文学で白い花しか咲かせなかったという50年代に、鮮やかな色彩を添えられるのではと密かに期待しています。一つでも多く当時の作品を発見することが、50年代の通俗研究を続ける限り、今後も不可欠な作業だと思います。

集集線とマンゴスチン

北波道子 (関西大学)

1993年4月から2年間、私は台湾中部の町で日本語教師をしていた。台湾には、台北、基隆、台中、彰化、嘉義、台南、高雄と南投のYMCAがあり、それぞれが日本語や英語の会話学校を運営していた。そして、私は彰化YMCAの員林ランチに、ただ一人の日本人教師として配属されたのである。

私が赴任した時、員林ランチにはリビーというシアトルから来たアメリカ人がいた。彼女の方はただ一人のアメリカ人。半ボランティアの外国人教師の生活は、お金もあまりなかったけれども、仕事もそれほど忙しいものではなかった。鉄道の便が比較的良い田舎町という言葉がふさわしい員林鎮には中国語を学びに行くような外国人向けの語学学校もなく、まだ台湾研究にも目覚めていなかった私には有り余るほどの時間があつた。こうして、週末にはリビーに誘われるままに、近隣の観光スポットである日月潭にハイキングに通つたのだつた。もちろん、この日月潭が、日本統治時代の電源開発と工業化の転換点として、ひいては戦前台湾の経済発展の大きな画期として、後日、自身の主要な研究対象の一つとなる湖であるとは、この時の私には知る由もなかった。

員林駅から各駅停車に乗って4つ目が二水駅、そこで単線の支線に乗り換えた。列車は、茂みの中をかき分けるように、少しカーブしながら疾走し、開けっ放しの窓から、迫りくる緑の壁が涼風を送り込んでいた。それが集集線、日月潭発電所建設のために台湾電力株式会社が設置した工用の鉄道であつた。

まだ台湾の近代化遺産が注目される以前のことで、観光資源化される前の集集線は、単なるさびれたたまたまのマイナーな現役ローカル線であり、わざわざ乗りに来る観光客に出会うこともほとんどなかった。乗継も本数も不便の一言で、当時、すでに豊かになった台湾では、日月潭は自家用車で訪れる場所であり、在来線を使う人はほとんどいなかったのではないだろうか。しかし、車もバイクも持たなかつたりビーと私は、水里駅で

集集線を降りてローカルバスに乗り換え、バス停からは徒歩で湖に向つた。要するに、値段は安い、本数も少なく、時代から取り残されたような田舎の公共交通を利用する人は、暇で貧乏な外国人か、昔ながらの習慣を守る地元のお年寄りくらいしかいなかったのである。

今思うと、そうであつたからこそ、おそらくは戦前とあまり変わらない集集線の雰囲気を感じることができたのではないか。というわけで、後に、私はリビーとあの呑気な日々に関心から感謝するようになった。日月潭の電源開発について研究を始め、図面に描かれた集集線を目にしたときに、「ああ、あの鉄道だ！」と思ひ出し、その情景から、懐かしさと同時に当時の工事の困難さをより具体的に想像することができるような気がしたからである。それだけに、1999年の921大地震で、集集線が壊滅的な被害を受けたと聞いた時には、そして、その翌年春に、壊れた駅や線路、トンネルを実際に目にしたときには、本当に悲しい気持ちになつた。

話を1993年に戻そう。水里駅から日月潭に向かう道中、いつも決まって水と果物を購入する小さな店があつた。バスに乗る前だつたか下りた直後だつたのか記憶はすでにあやふやになっているが、その店で私は生まれて初めてマンゴスチンと出会つた。紫色の可憐な外見と優しい木製品のような質感。意外にやわらかい殻を注意深く割ると中から白くて甘く、そしてすこし酸っぱい果実が現れる。私はすぐにこの果実が好きになり、しばらくは見かけたら必ず買つていた覚えがある。

ところが、それから20年後、昨年6月になって、私は衝撃の事実を知る。そのきっかけは、高雄の農家が10年かけてマンゴスチンの国産化に成功したとの報道を『民視新聞』のウェブニュースで見つたことであつた。なんと、記事によれば、マンゴスチンはもともと台湾では栽培できず、タイから輸入されていたが、10年前に果実バエ汚染によって輸入禁止となつてからは、ほとんど流通しなくなつていたのだという。

「ということは、あの時食べたマンゴスチンは台湾のものではなかつたんだ…。」

孫逸仙博士図書館での思い出

松本充豊 (天理大学)

私はずっと、台湾でエキゾチックなトロピカルフルーツに魅せられた外国人というスタンスで、マンゴスチンもそのうちのひとつと思っていたのだが、マンゴスチンは台湾の人にとってもエキゾチックな熱帯の味だったのである。そういわれれば、私も長い間、マンゴスチンを食べていなかった。なるほど、それは見かけることがなかったからなのだ。おそらく、外貨がだぶつくようになった1990年代初頭の台湾には、外国からいろいろな珍しいものが流れ込み始めていたのだろう。つまり、1993年に私が台湾でマンゴスチンと出会ったというのは、大げさに言えば台湾の経済発展の成果の一つであったのだ。

さて、アメリカ人教師は9月に交代の時期を迎え、リビーは帰国してしまったので彼女との日月潭通いは半年にも満たない短い期間のことであった。その後、折に触れ連絡をとっていたが、二人とも母親となり、子育ての合間に引越を重ねることで、いつしかクリスマスカードも届かなくなっていた。そしてさらに月日は飛ぶように流れ、地震で破壊された集集線も2011年には全線で営業が再開された。自分の頭の中では変わった実感はないけれど、しっかり時間は経っているのである。

時々、もう一度集集線に乗ってあの時の記憶をたどってみたいという強い気持ちがわいてくる。が、今の私には、あの走行距離30キロ足らずのローカル線に乗るために、二水駅に向かう余裕はともて持てそうもない。というわけで、その代わりに、今度台湾に行ったら、高雄で栽培されたマンゴスチンを食べてみたいと思う。今度は間違いなく台湾産である。

台湾に留学して半年ほど過ぎた頃だっただろうか。1998年の春節明けあたりから台北市内のある場所に日参するようになった。国父紀念館の中にある孫逸仙博士図書館である。

きっかけは「国父紀念館の図書館に国民党の会議録があるよ」という陳鵬仁先生の一言。仁愛路に「仮住まい」中だった中国国民党（以下国民党）本部、党史委員会の主任室にお訪ねしたときのことだ。留学はしたものの、研究テーマが定まらなっていた私は、とにかくこの話にとびついた。陳先生に早速電話を入れていただき、私は仁愛路を東に向かうバスに飛び乗った。

国父紀念館の館内に入ると、北東の角に図書館があった。孫逸仙博士図書館という名前も、そのとき初めて知った。重いドアを開けて中に入ると、そこは新聞や雑誌がお目当てのお年寄りでいっぱいだったが、階段を上がった2階はまったくの別世界。重厚感のある木製の大きな机がいくつも並んでいるのに、利用者はだれもいなかった。その日は職員の方に挨拶しただけで失礼したが、翌朝また訪れると、机の上にはすでに「改造」期（1950年～52年）の会議録が準備されていた。

実は当時、孫逸仙博士図書館の地下の書庫には、1949年以後の国民党の史料が大量に眠っていたのだ。李登輝政権末期には国民党の史料の公開がかなり進み、党本部が仁愛路から中山南路に移転すると、その7階には同党のアーカイブ・党史委員会の閲覧室が設けられた。孫逸仙博士図書館（特にその2階）は、まさに知る人ぞ知る、その分館でもあったのだ。生まれて初めて国民党の史料を手にした私は、最初はどう読めばよいのかわからず、ただペラペラとめくっていたが、史料に触れる面白さを感じるのにさほど時間は必要なかった。

国民党の史料が気づかせてくれたことがある。それは、中国近代史との連続性を抜きにしては理解できない部分が、やはり台湾には存在しているのだということ。ごく当たり前のことなのだが、当時の私は台湾の「台湾的なもの」ばかりに目を奪われていた。急速に進展する「台湾化」を現地

で目の当たりにし、その勢いにすっかり呑みこまれていた。台湾にあったはずの国民党だが、史料が伝えてくれる内部の様子に「ここは中国やったんや」と痛感したことを思い出す。

台湾の「中国的なもの」に興味を湧いてきた私は、図書館の史料をたよりに国民党の財務と「党営事業」の歴史を調べようと決めた。「党営事業」の起源を探ったところ、国民党の中国大陸時代にまでさかのぼる羽目になったが、「党国一体」の産物と批判された「党営事業」は、「憲政」実施に伴う「党国分離」への国民党なりの対応策だったことがわかった。

戦後の財務資料を集めるのには正直、難儀した。主管部門の財務委員会の檔案は党史委員会に移管されておらず、何らかの資料を得るには中央常務委員会などの会議録をしらみつぶしに当たり「財務委員会報告」を探しだすしか手はなかった。私も覚悟を決めて、中央常務委員会と中央工作会議の会議録を1969年までの約20年分すべてひっくり返した。「報告」だけに依拠したことの限界はあったが、国民党の財務や「党営事業」の姿をある程度描くことができたと思う。

ところで、会議録というのは、会議の議事録と提出資料を一定の回数分まとめて製本したもので、ハードカバーの装丁が施されていた。いったい何年書庫で眠っていたのだろうか。カビや埃まみれの表紙はとにかく汚れがひどくて閉口したが、中身の保存状態は極めて良好で、ガリ版印刷で会議の内容がきちんと記録されていた。職員の方は「面倒だから」といって、一度に10数冊の会議録を台車に載せて、書庫から運んできてくださった。

最初に「荷卸し」が行われた複写機に一番近い机が、以後私専用の作業スペースとなった。机の上には常時会議録がワンセット積み上げられ、たとえ何日かかろうとも、見終わるまでずっとそのままにしておいてくださった。私が見終わったことを伝えると、それと交換に新しいワンセットが運ばれてきた。時には「こんなのがあったよ」と掘り出し物を見つけてきてくださった。私はひたすら会議録をめくり、これという記録や資料があれば付箋をつけて、ある程度まとまったところで

複写機へ運んだ。そうなのだ、料金さえ支払えば、自分で、自由にコピーをとることができたのだ。

とにかく異例、かつ破格の待遇だった。ポスの紹介だったからか。あるいは、党本部の目の届かない場所だったからこそ許されたのかもしれない。後日党本部の閲覧室を訪れたら、コピーはすべて依頼せねばならず、速記録などの直筆の史料については「写経」を強いられた。理由はどうであれ、献身的に支えてくださった職員の方には、今なお感謝の念に堪えない。

実は、一度だけ地下の書庫への立ち入りを許されたことがある。921大地震の直後のことだ。「とにかく様子を見てこらん」と職員の方に連れられて行った先は、倒れた書架や散乱した書籍が通路をふさぎ、大地震の衝撃の大きさを伝えていた。やっとのことで辿りついた会議録の並んだ書架だけは、不思議なことにほとんど無傷だった。私は急いで懐中電灯を借りて、いつ頃までの会議録があるのか確かめた。少なくとも1980年代半ば、蔣経国時代末期ぐらいまでであることは確認できた。「これから毎年ここに来て、その都度新しい史料を見たらええな」。私はこの時、そんな算段をつけていた。

ところが、図書館をさらなる衝撃が襲った。2000年の政権交代である。それは国民党の史料を取りまく環境を一変させてしまった。国民党の史料は長期政権下で事実上公的なものと化していたが、政権交代がそれを私的なものへと変えてしまったのだ。国父記念館という場にその一部が置かれていたことが問題となり、まもなく国民党の史料は地下の書庫から姿を消してしまった。私の算段もあっけなく崩れた。党本部の閲覧室では、数か月前には見せてもらえた速記録をもう一度閲覧したいとお願いしても、取り合ってもらえなくなった。

国民党長期政権、同党の史料公開の進展、党本部から隔離された場所という条件下でこそ存在した特別な空間。それが私にとっての孫逸仙博士図書館だった。国民党の史料の閲覧事情が厳しい状況にある昨今、当時を振り返るたび稀有な幸運に恵まれたとつくづく感じる。ただ最後には「時計の針を戻せたら」という月並みな思いばかりが残るのだが。

屏東の林徳勝道長との出会いと交流 —台湾道教のあり方を学ぶ— 山田明広 (関西大学非常勤講師)

私は、2003年8月から2006年2月までの約2年半、道教儀礼の調査・研究を行うべく台湾で留学し、以降、フィールドワークと文献読解を組み合わせた方法により現代の台湾の道教儀礼について研究している。台湾留学を経て以降現在まで、台湾の多くの道士、研究者、大学院生、フィールドワーク仲間などと知り合うことができたが、本稿ではその中でもとりわけ印象深く、また、私の研究に大きな影響を与えて下さった林徳勝道長について述べたい。

林徳勝道長（以下、「林道長」と称す）は、屏東県在住の道長で、かつては東港鎮東隆宮の平安祭典（王爺を迎えて行われる疫病祓いの祭りのこと。迎王祭典とも言う。台湾では非常に有名な祭り）をはじめ多くの道教儀礼を主持されていた、台湾道教界では非常に著名な道長である。私が台湾留学中はまだ自ら儀礼を行っておられたが、数年前より体調を崩され、現在は儀礼の依頼を受けられはするものの、その実施はほとんど弟子に任せられており、自ら儀礼を行われることはほとんどない。

林道長と最初に接点を持ったのは、私が台湾での留学を開始してから1年5か月ほど経った頃であった。翌月から台湾大学文学院中国文学研究所博士班の交換派遣留学生となるため、間もなく台南から台北へと引越ししようとしていた時期で、その日は、台北での新居の鍵を受け取りに来たついでに、台北大学のフィールドワーク仲間を訪ねに来ていた。

すると、急に見知らぬ番号から私の携帯電話に電話がかかってきた。林道長からの電話であった。林道長は普段は台湾語を話されているものの、この時は日本人である私に合わせて不慣れな国語（台湾の標準中国語）で話されていた。その時の電話の内容は、私の国語聞き取り能力がそれほど高くなかったこともあり、理解できなかった部分も多々あったが、聞き取れた部分から総合すると、おおよそ、「現在の台湾の道教儀礼は乱れており、そのようなのを道教儀礼の本来のあり方だと思わ

れたくない。今度、功德儀礼（死者追善供養の儀礼）があり、道教儀礼とは本来どうあるべきか示すので見に来ないか」といったものであった。

1週間ほど経って儀礼が行われる当日となり、私は電車で潮洲駅まで行き、そこから林道長の奥さんが運転する車に乗って、林道長のご自宅へと向かった。そして、そこで初めてご本人とお会した。林道長は道長らしく口ひげを蓄えられ、非常に威厳のある風貌をされていた。この時は、林道長宅で2晩泊めていただき、2日間に渡って行われた儀礼の調査を行ったが、緊張のあまりどんな会話を交わしたのかあまり覚えていない。ただ一つ覚えているのは、台湾の道士の中には儀礼を行うに当たり檳榔を噛んだり、休憩中に賭博したりする者がいるといったような、風紀上の乱れを林道長が嘆いておられたということである。

これ以降、私は何度も林道長のもとを訪れては、儀礼を見せていただいたり、質問に答えていただいたり、科儀書（儀礼中に読まれる内容などが記された書物。儀礼を行う際に手前に置いて参照する）や文書（儀礼中に神や亡魂に請願ないし命令・通知するための文書）などの資料を提供していただいたりした。

科儀書や文書、さらには儀礼中の密呪などは、道士にとっては大事な商売道具であり、基本的には門外不出のものである。私はそのことを知っていたので、自分から進んで提供をお願いすることはあまりしなかったが、林道長は私の質問内容などから、私が何を必要としているのか察していただき、可能な限り私に提供して下さった。この他、私が訪問するたびにお酒やご馳走でもてなして下さり、さながら久しぶりに帰ってきた息子のようにつながり下さりもした。

私が台湾で留学していた当時、台湾の道教儀礼の研究は、台南地域のものを扱ったものが中心で、その他の地域のものを扱ったものはあまり存在しなかった。そこで、私は、他の地域のものも調査・研究し、相互比較してみたいと考えていた。そんな折、屏東の林道長の方からお誘いが来て、前述のように儀礼を見せていただけたのみならず、種々な資料も提供していただけたのである。

こうして、私は、台湾留学以降、林道長から提供していただいた資料をもとに、高雄・屏東地域の道教儀礼の研究に本格的に取り組むようになり、同時にそれ以前から研究していた台南地域の道教儀礼との比較研究も行うようになったのである。したがって、私がこれまで高雄・屏東地域と台南地域の道教儀礼の比較をテーマとした研究業績を残しているのは、林道長のお陰であると言っても過言ではない

林道長については、もう1点特筆すべきことがある。それは、林道長自ら明・周思得『上清靈宝濟度大成金書』などといった歴史的儀礼文献を研究して、師から伝承された儀礼を補修・整備されているということである。道教儀礼は基本的に師や親などから学び伝授されるものであるが、伝授された手抄の科儀書などに誤写があったり、あるいは偶然ないし意図的にある部分が伝承されなかったりする場合がある。こういった儀礼上の誤りや欠如は、多くの場合、伝承されてきた状態のままにされ、ほとんど手が加えられることはない。

確かに、そのままでも信徒は誤りや欠如があることなど分からず、道士は何の問題もなく儀礼を行ってお金を稼ぐことができる。しかし、林道長は、このような状態を看過することができず、今後の道教の発展のためにと歴史的儀礼文献を研究されるなど、他の道士がしないような苦勞をなさって、道教儀礼を修正・整備されている。伝統に手を加えることについては賛否あるかも知れないが、私は、林道長のこのような、道教の発展のためならどんな苦勞も厭わない、といった精神・態度を高く評価したい。

最後に、林道長があの時なぜ私に電話してこられたのかについて、今思うと、おそらく、外国人という客観的視点から、台湾道教とはいかなるものであるか理解し、さらに宣伝してもらいたかったのではないと思う。私はこれまでいくらか台湾道教に関する研究業績を残しているが、まだまだ林道長のこのようなご期待に十分応えられていないであろう。今後ますます台湾道教の研究に邁進することで、台湾道教を宣伝する一助となるとともに林道長のご恩にも報いていきたいと思う。

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会

担当幹事：小笠原欣幸（東京外国語大学）

第85回

シリーズ「台湾史研究の回顧と展望」

日時：2013年10月4日（金）18:20～20:30

場所：早稲田大学早稲田キャンパス1号館2階

報告者：湊照宏（大阪産業大学）

司会：春山明哲（早稲田大学）

報告タイトル：

シリーズ台湾史研究の回顧と展望(2)：経済史
参加人数：18名

活動報告：

本報告は、主に1990年代以降の日本における台湾経済史研究を振り返り、問題意識の変遷を考察するとともに、各個別研究の研究史における位置づけを図ることを目的としている。台湾経済史の代表的な著作として、矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』があり、これを超える水準の研究として現れたのが涂照彦の『日本帝国主義下の台湾』である。この涂照彦の研究はしばらく標準であり続け、1990年代以降における台湾経済史研究は、同書を乗り越えようとする若手研究者を中心になされた。冷戦の終結にともなう社会主義体制の動揺によるマルクス経済学の退潮やアジアNIEsの経済成長を背景として、日本独占資本による台湾人に対する搾取や収奪といった論調は後景に退き、戦後台湾の経済成長につながるような内発的成長要因の探求、戦後台湾の工業化に寄与した近代的諸制度やインフラストラクチャーの分析、また、戦前と戦後をまたいだ産業史研究が多くなっていった。しかし、金融と労働の分野はほとんど進展を見なかった。今後は、理論と実証の両方を意識

した定量的かつ定性的な分析、および工業部門と農業部門との連関を意識しそれぞれの相対的比重をふまえたうえでの分析が必要となってくる。

(記録者：武井慎人)

第 86 回

日 時：2013 年 10 月 15 日 (火) 18:30~20:30
場 所：東京大学東洋文化研究所 3 階 303 号室大
会議室 (東京大学本郷キャンパス)

報告者：伊藤信悟 (みずほ総合研究所)

司 会：松田康博 (東京大学)

報告タイトル：

「ECFA が台湾経済に与える影響
—中台サービス貿易協定締結を踏まえて—」

参加人数：14 名

活動報告：

ECFA は 2010 年 9 月 12 日に発効した中台間の経済協力枠組み協定である。その具体的な内容を拡充するものとして、2013 年 6 月 21 日は中台サービス貿易協定が締結された。本研究会では、日中・日台間の経済貿易研究の第一人者である伊藤信悟氏 (みずほ総合研究所アジア調査部中国室長) を講師にお迎えし、同協定の内容および台湾経済への影響、その効果に対する馬英九政権の説明、台湾社会における批判・懸念についてご解説いただいた。サービス貿易協定においては、2011 年元旦以降実施されてきた物品・サービス貿易アニーハーベスト (先行的な少数品目の関税率引き下げ) 同様、中国の開放品目が台湾のそれを上回っている。その効果は中国側にとっても台湾側にとっても限定的であるが、馬英九政権は定量的な効果より定性的な成果を訴えている。同政権に対し台湾社会からは、民意の不尊重、雇用や安全保障、言論・政治の自由、個人情報保護への悪影響など、さまざまな議論が噴出している。ただしこれらの中には、基礎的な法律があるにも関わらず、それにメンションせずに批判している事例も見受けられる。モニタリングによって悪影響を防げるのか否かを検討する手前で、水掛け論をしているような状況である。また、そもそも台湾社会がモニタリングのコストを払えるのかという問題も残されている。質疑応答においては、中国は WTO 加盟国

であり、通常は最恵国待遇を与えられるべきところ、台湾はそれを無視して中国のみ差別待遇している問題について、大陸サイドは台湾との問題を国際機関において処理したくないので提訴しないという込み入った事情について解説がなされた。フロアからは、台湾の新聞報道からは本質をつかみ難い同協定をめぐる問題について、明快な整理と分析がなされた本報告への謝意を示す声が上がった。

(記録：家永真幸)

第 87 回

日 時：2013 年 11 月 22 日 (金) 18:20~20:20
場 所：早稲田大学早稲田キャンパス 1 号館 2 階

報告者：宇治郷毅 (元国会図書館副館長)

司 会：春山明哲 (早稲田大学)

報告タイトル：

「石坂荘作の教育事業をめぐって」

参加人数：13 名

活動報告：

本報告では、日本植民地統治期における石坂荘作の業績を、教育事業を中心として再評価をする試みが行われた。石坂は「忘れられた先駆的教育家」として位置づけられる。戦前においては、石坂についてのまとまった評伝あるいは研究書はなく、学界からは終始無視された。また戦後も、台湾でも日本でも長く忘れられた存在になっていた。しかし、1990 年代以降の台湾における「民主化」「台湾化」の流れの中で、詳細な郷土史研究や日本統治期研究が可能となり、石坂の人格や業績を評価する研究が現れ始めた。とりわけ、基隆市では郷土に貢献した「民間教育家」として日本人として唯一評価され、市刊行物に公式に取りあげられる存在となっている。石坂は地方経済・産業分野、地方行政及び公益事業分野などでも業績を残しているが、とりわけ教育事業における業績は注目に値する。公立学校制度から排除された勤労青少年への教育を担った「基隆夜学校」、地方女子教育に貢献し、教育に近代性も認められる「基隆家政女学校」、台湾最初の近代図書館である「石坂文庫」などがその例である。もちろん、近代化・日本化・格差化の面から見て、教育事業の限界性も

指摘できるが、他方でその進歩性には評価できる点が多い。報告者は石坂を、台湾の民衆に寄り添い、台湾から得たものは台湾に返した日本人であったと評価している。

(記録者：武井慎人)

第 88 回

日 時：2013 年 12 月 6 日 (金) 18:20~20:20

場 所：早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館

502 教室

報告者：笠原政治 (横浜国立大学名誉教授)

司 会：春山明哲 (早稲田大学)

報告タイトル：

シリーズ台湾史研究の回顧と展望(3)：

「日本における台湾原住民族研究の回顧と展望」

参加人数：21 名

活動報告：

台湾の原住民族は、第二次大戦前に、日本の人類学フィールドに基づく研究が最も早くから、最も活発に行われた民族の一つである。戦前の調査研究は、領台初期における伊能嘉矩・鳥居龍蔵・森丑之助などの「学術探検期」、1909 年前後の臨時台湾旧慣調査会の時期、空白時期を挟んで 1928 年以降の大学などの専門家による調査の時期に分けられる。このように、戦前の原住民族研究は活発なものであったが、旧慣を探る「伝統志向」の研究が主流であったこと、および 1930 年以降の変化の様相を主題にした研究がきわめて乏しいことなどの点は注意が要する。戦後は、1990 年頃までは日本人研究者の数は増えず、また「伝統志向」の人類学が伝統だった。ところが、1980 年代終盤の戒厳令の解除や民主化の進展によって状況が大きく変わった。台湾全体で原住民族に対する理解が深まり、そうした変化は日本の研究状況にも波及した。日本統治時代の記録・研究は新しい時代の文脈に置かれ始め、第二次大戦前からの研究の伝統を引く日本の研究者は、フィールドワークによる研究に加えて、「研究史の研究」が不可欠の課題になった。今後の展望にかえて、報告者は、通婚によって子・孫の世代でアイデンティティのあり方が変化していることを指摘した。また、台湾

と日本の関係を超えた学術研究の広がりをどのように確保していくのかについても、検討すべきだとしている。

(記録者：武井慎人)

第 89 回

日 時：2013 年 12 月 20 日 (金) 18:20~20:20

場 所：早稲田大学早稲田キャンパス 1 号館 2 階

報告者：菅野敦志 (名桜大学)

司 会：春山明哲 (早稲田大学)

報告タイトル：

シリーズ台湾史研究の回顧と展望(4)：教育史

参加人数：21 名

活動報告：

本報告の目的は、台湾史の中でも教育史をレビューし、その上で今後の研究の方向性を探ることである。台湾教育史は通中「戦前」と「戦後」に大別されるが、台湾が植民地であったという特殊性ゆえに、戦前は「植民地統治期」の日本教育史、戦後は「中華民国期」の外国教育史として位置づけられる。そのため、日本においては、一般的にも学術的にも、その関心はおのずと 1945 年までに止まるものであり続けた。この研究面での断絶が生じてきたという点は大きなポイントである。台湾の教育史は、制度的枠組みを研究し、支配と被支配の構造を明らかにするところから出発したが、次第に様々な主体の思考や行動に対する関心へと焦点が移っていった。この「制度から人」への転換には、研究者個人の努力の他に、外的要因として民主化後の政治的变化による隣人台湾の変化が挙げられる。隣人による問題的に触発される形で、日本植民地研究に対する新たな研究の視座が「第三世代」によって提示されたこと、そしてそのような視座から台湾を研究する新世代の研究者が登場していったことの意義は大きい。このような視座からの研究は、「研究史研究によって、結局、教育とは何かということが明らかになる」という普遍的な問いが、過去の歴史が現在だけではなく未来にも開かれるという対話の可能性を示唆している。

(記録者：武井慎人)

第 90 回

日 時 : 2014 年 1 月 31 日 (金) 18:20~20:20
場 所 : 早稲田大学早稲田キャンパス 1 号館 2 階
報告者 : 浅野豊美 (中京大学)
司 会 : 春山明哲 (早稲田大学)
報告タイトル :

シリーズ台湾史研究の回顧と展望(5) :

政治史・法制史

参加人数 : 25 名

活動報告 :

本報告は台湾史研究の中でも、政治史と法制史を振り返るものである。政治史と法制史の分野では、枠組みを意識しない実証する研究スタイルと、枠組みを追究・意識した研究スタイルがあるが、この両極端にほとんどの研究が存在している。報告者によれば、過去に漂っている未知のものに肉薄する実証研究とそれを土台にした大胆な枠組みが必要である。また、ナショナリズム史観・国民国家の成功失敗物語を超える模索がなされなければならない。具体的な研究テーマ・視点としては、地方政治史や、植民地官僚史といった個人を前提とした政治史、原住民族社会の慣習と村落変容などの共同体の把握とそれをめぐる政治、帝国としての一体的な資本主義や東アジア資本主義といったマクロの政治経済史的視点、中間団体や関係・法に着目する戦後の連続という視点、周辺地域との接続をさぐる国際関係の中の帝国史という視点などがある。報告の最後には、国民意識の誕生、展開、衰退の雁行形的発展やもつれ合いも問うべきであるといった問題が提起された。

(記録者 : 武井慎人)

定例研究会

台 北

担当理事 : 富田哲 (台湾・淡江大学)

第 65 回

日 時 : 2014 年 1 月 25 日 (土) 15:00~
場 所 : 台湾大学台湾文学研究所口訳教室

報告者 : 山口守 (日本大学文理学部、日本台湾学会理事)

テーマ :

「私の台湾文学研究クロニクル」「台湾文学研究の現在(1990~):歴史・言語・共同性をめぐって」

使用言語 : 日本語

— . —

学会運営関連報告

担当理事 : 垂水千恵 (横浜国立大学)

第 8 期理事会

第 3 回常任理事会 議事録

日時 : 2014 年 3 月 8 日 (土) 14:00~18:30

場所 : 日本大学文理学部七号館中文学科会議室

出席 : 北波道子、佐藤幸人、星名宏修、松金公正、三澤真美恵、山口守 (以上、常任理事)、家永真幸 (大会実行委員)

欠席 : 川島真、駒込武、垂水千恵、松田康博 (以上、常任理事)、藤井省三 (大会実行委員長)

(各委任状あり)

主宰 : 山口守理事長

書記 : 松岡格

報告

1. 理事長・事務局

(1) 山口理事長

・在台会員の会費振込口座 (変更後) はすでに稼働している。

(2) 佐藤副理事長

・ 2 月 18 日に台湾協会と駐日台北経済文化代表処を表敬訪問した。

2. 各業務担当

(1) 三澤会計財務担当理事

・ 複数年会費未納者への督促状に対して反応があった。

(2) 佐藤編集委員長

・ 審査対象論文 16 本のうち、掲載は 6 本、これ以外に西成彦氏の講演原稿、書評 2・3 本を掲

- 載予定。
- (3) 星名企画委員長
- ・特になし
- (4) 松田広報担当理事 (佐藤理事代理報告)
- ・ニュースレター25号が12月末日付で発行された。26号からメールサービスに移行する。
- (5) 松金文献目録担当理事 (佐藤理事代理報告)
- ・2013年3月末現在10,089件(前年比468)、11月末現在で10,534件(+445)、2014年1月末10,684件(+150)。2013年4月から2014年1月末の増加件数は595件。

議題

1. 第16回学術大会について

(1) 会場校の準備状況について

(藤井実行委員長、家永委員代理報告)

- ・実行委員会のメンバーと役割分担はほぼ確定した。委員各自で準備を始めているところである。
- ・懇親会は山上会館を予約済。参加費は例年通り、事前支払い5,000円(学生3,000円)、当日5,500円(3,500円)に設定する。
- ・開催校企画シンポジウムは「中台関係の新展開と社会変動」というテーマで開催する。報告者とコメンテーターが決定した。
- ・星名企画委員長からプログラム案の前提となる企画情報について説明があった。

(2) 大会予算案について (三澤理事)

- ・仮承認された。予算案訂正版を実行委に差し戻し、再提出されたものを再審議する。

2. 学会報の有効利用について (佐藤理事)

- ・学会報の表紙・裏表紙の裏スペースを賛助会員の書店に(無料)提供することが、再審議の結果、承認された。

3. 学会賞選考委員について

(駒込理事、三澤理事代理報告)

- ・政治経済部門については北波道子(関西大学)、歴史社会部門については洪郁如(一橋大学)、文化文学言語部門については陳培豊(中央研究院)会員を推薦、承認された。

4. メーリングリストについて

(松田広報担当理事、山口理事長代理報告)

- ・配信停止希望者については希望通り対応した。未登録者について、学会事務局にメールアドレスを届けていない場合は、事務局で把握に努める。
5. 入会者の会費支払いについて (三澤理事)
- ・入会を認められたが、会費を支払っていない者について、督促を出すことが承認された。
6. 会員の入退会について
- (垂水総務担当理事、山口理事長代理)
- ・坂元ひろ子、河田悌一、川合一良の各氏から退会希望あり、承認された。
7. 次回の常任理事会の日程について
- (垂水総務担当理事、山口理事長代理)
- 次回常任理事会は2014年7月12日(土)の14時に開催予定。

以上

お知らせ

2013年5月25日に行われた会員総会でアナウンスがありましたように、ニュースレターは電子化されることとなりました。今後のニュースレターは、メールサービスで送付されます。会員の皆様におかれましては、メールアドレスをご登録ください。

メール不着等の不具合、登録メールアドレスの変更・追加、登録解除など、本件に関するご連絡は、担当の山崎直也幹事 [jats_web\[at\]jats.gr.jp](mailto:jats_web[at]jats.gr.jp) までお知らせください。

なお、ニュースレターは発行と同時に、学会ホームページにアップロードされます。

<http://www.jats.gr.jp/newsletter/newsletter.html>

メールアドレスのご登録がない方に関しては、今後学会ホームページをご覧ください。

(松田康博・広報担当理事)

***** 編集後記 *****

- ・事情により本号の編集を担当いたしました。
- ・「特集」では、会員の皆さまの専門領域の多様性と豊かな経験が共有できるような記事を集めたい、と企画しました。執筆者の皆さま、関係者の皆さまにお礼申し上げます。
- ・ご感想がありましたらぜひお寄せください。

(大東和重)

日本台湾学会ニュースレター 第26号

発行：日本台湾学会（代表 山口守）

発行年月：2014年9月

■ 日本台湾学会事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 松田康博研究室気付

日本台湾学会事務局

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ ニュースレター発行事務局

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

関西学院大学法学部 大東和重研究室気付

E-mail: kaohigashi@kwansei.ac.jp